

飛躍のとき

「21世紀は生物物理の世紀」という巻頭言（2000年40巻2号）を、当時MITの教授だった畏友、故田中豊一が残してから既に5年がたった。いよいよ本格的に「生物物理の世紀」が始まろうとしている。遺伝子解析の時代を越えて生物・生命科学はどの方向に向けて発展するか。工学、医学への道は誰の目にも見えている。では科学そのものの発展はどうだろうか。少なくともいえることは、物理科学の基盤なくしてその発展はありえないということだ。生き物の生き物たるゆえん、生き物らしさを生み出しているさまざまな生物機能の仕組み、それがわからない限り、科学としての深化はありえない。そこで中心的な役割を担うのが生物物理だ。しかし、生物物理が生物・生命科学の根幹にしっかりと根を下ろすまでには、まだまだ越えるべき山がある。そして皮肉なことに、根を下ろしてしまってからでは、学問としての真の面白さを味わうことは難しい。ひと山越える、その過程の中にいてこそ研究者としての醍醐味を味わうことができるだろう。生物物理のそのような飛躍のときを目の当たりにしたいものである。

生物物理学会の仕事を引き受けして1年以上がたった。当初私が考えたことは、この学会を“普通の学会”にしようということだった。その意味は、会長、副会長に数人の運営委員という少数の人が運営に深くかかわる同好会的な学会ではなくて、規模に応じてしかるべき数の多様な会員が学会運営にかかわり、生物物理という学問分野を多彩に発展させていけるような学会にしようというものである。そうはいっても大層なことができるわけではないし、そのつもりもない。それこそ“普通の学会”にするのだから、奇を衒った方策を打ち出すわけではない。手始めに“若手奨励賞”を設けることを提案した。生物物理学会から、生物・生命科学の明日を担う若手を、世界中どこに行っても光るような若手を、期待を込めて送り出したい。そういう“普通の学会”が望むであろう機能をこの学会にもたせようというのである。英文誌 *e* ジャーナル *BIOPHYSICS* の発刊も、この考えに立てば、同じ範疇に入る試みである。ただ、これまでの生物物理学会が築いてきた良き伝統は生かし続けたい。“若手奨励賞”についていえば、その選考法・表彰法に独自性を出すこと。*e* ジャーナルについては、無理に論文を集めることをせず、特徴あるものを根気良く公表しつづけること。そして、わが国を中心とするアジア・オセアニア地域における生物物理の発展に、息長く確かな寄与をすること。組織の拡大に腐心するのではなくて、学問・研究に個性と独創性を出すために組織として何ができるかに知恵をしぼる。将来の生物物理を背負う若手・女性研究者の出現を期待するのであれば、手を取って教えることに力を注ぐのではなくて、彼らが自分達の持てる力を十二分に発揮できるような“場”を用意することを考える。このような作業を、多くの人たちの知恵と力を結集して進めたい。

今を生きるとともに、次の世代に夢を託すための準備をしたい。学問を好む若者を惹きつける力をもった学会の整備を期したい。すべては生物物理の飛躍のときを迎えるために。

早稲田大学理工学部物理学科 石渡信一（平成16、17年日本生物物理学会会長）